

王様になった僕の陵辱週姦



「小説」斐芝嘉和
「表紙イラスト」やすの

試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『王様になった僕の陵辱週姦』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



王様になった僕の陵辱週姦

斐芝嘉和
表紙 / やすの

登場人物紹介

Characters

はやましゅんけい

葉山 俊介

冴えない平凡な学生。ランプの精の力によって歪んだ欲望を露にする。

ふじさわ みゆ こ

藤沢美柚子

俊介の同級生で、学年一の優等生にして学園一の美少女。

しろやまやよい

城山弥生

高飛車で怖い物知らずのお嬢様。お淑やかな美柚子とは対照的な派手でよく目立つ美少女。

ある日曜日——葉山俊介は己の小遣いを少しでも増やそうと思ひ、祖父の家の土蔵に忍び込んだ。骨董好きの祖父はかなりボケてきているし、本家のオジサンオバサンは骨董にまったく興味がないので、俊介がいろいろ持ち出してちよこちよこ売り払っているのを知つていても、いまのところはなにも言わない。

実際、価値のある物はほとんどないのだ。いままで一番高く売れた茶壺でも、わずか一万円だった。業者を呼んですべての物を査定してもらつても、たぶん運び賃くらいにしかならないだろう。

オジサンやオバサンにしてみれば、俊介にガラクタ処分の手伝いは無償でさせているよなもの。だったらお茶くらい出してくれてもいいのに——と。

「なんだコレ？」

棚のうしろに隠すように押し込まれていた木箱を見つけ、埃まみれになりながらなんとか引つ張り出す。箱書きはなく——中にはアラビア風のランプが入っていた。

装飾は凝っている——というか、凝りすぎだ。無数に埋めこまれている赤や青の小石のせいで、逆に安っぽく見える。

「せいぜい五千円くらいか……」

値踏みした俊介は、ふと思いついてランプの側面を袖で擦つてみた。

すると——ポボンッ！

青白い煙が吹き出し、怖ろしげな顔つきの巨人が現れた。

「うわっ!? ま、マジか……!?!」

自分の目を疑うとは、まさにこのこと。

しかし、分厚い胸の前に太い腕を組んで偉そうに踏ん返り返った巨人は、すっかり腰を抜かした俊介を睥睨しながら、

「汝の願いをみつつ言え。汝の魂と引き換えに、我がそれらを叶えてやろう」
当たり前のような口調で言う。

まさか、そんな——こんなことが本当にあるわけがない——。

だがしかし、実際に巨人は目の前にいるわけで——。

「……どうした? 願い事はないのか? ないならなくても、我は構わぬが……」
「い、いや、ある! あるよ!」

ランプに戻りそうになった巨人を、慌てて引き留める俊介。

いまだに信じられないが、しかしこれが現実だ。ならば、どんな願い事でも叶えてくれるというあの話も、丸々信じて良いだろう。

しかし、いったいどんな願いを叶えてもらうべきか?

みつつすべてが叶えられたら魂を盗られる——つまり、死んでしまうわけで。

だとしたら、なるべくたくさんの願いを同時に叶えられる、効率の良い「願い」にしな

ければならない。さらに言うなら、死ななくて済む願いも紛れ込ませなければ――。

「……どうした、早く願いを言え」

「ちよ、ちよっと待って……」

「それが汝のひとつめの願いか？」

「ッ!? ち、違う違う! いま言うからっ!」

「分かつておる。冗談だ」

——どうやら巨人は、分不相応な状況に置かれてアタフタする人間を見るのが愉しい。怖ろしげな凶相を獰猛な笑みの形に歪め、遙かな高みから俊介を見下ろす。

「ええっと、ええっと……そ、そうだ! まずはひとつめ。僕は王様になりたい!」

「王? この国が欲しいのか?」

「そうじゃなくって。僕の命令にはだれも逆らえないし、僕がすることはだれにも邪魔されないっていう状態のこと」

「ほほう? ひとつの願いでふたつも叶えようというのか。欲張りだな」

「……ダメ?」

「まあよい。お安い御用だ。して、ふたつめは?」

ひとつめの願いが案外すんなり認められたので、俊介は密かに胸を撫で下ろした。次の願い事は、ひとつめに比べたらずっと軽い。本当はなくてもよいのだが、保険的な意味も

あるし、入れておいたほうがいいだろう。

「ふたつめは、僕がもし誰かを殺したとしても、その人間は数分後には甦って欲しい」

「ふむ。ずいぶん虫の良い願いだな。だがまあ、よい。ひとつめの欲深さに比べたら些細なことだ。して、みつめは？」

「みつめは……一週間経ったら、僕がこの箱を見つける瞬間まで時間を戻して欲しい」
可能な限り何気なく言ったつもりだったが、ランプの精は俊介の企みをあつさりで見抜いたらしい。口の端を凶悪そうに歪め、小賢しいな、と笑う。

「我がその願いを叶えた途端、我が呼び出されたという事実が消えて、汝は我的手からま
んまと逃げおおせるわけだ——しかし、本当によいのか？ 汝だけでなく世界全体が閉じ
た時の環から逃れられなくなるぞ？」

「か、構わないよ。時が戻れば記憶もリセットされるだろうから、退屈しないはずだ」

「ふははっ！ それはどうかかな？」

雷鳴のような笑い声を残し、煙のように掻き消えるランプの精。

こうして——俊介は一週間だけ有効な、絶対的な権力を手に入れた。

* * *

翌日、月曜日——。

（く、ううっ!? き、き……気持ち、イイツ！ 温かな鼻息が亀頭に吹きかかつて……又

ルヌルした舌や唇が、裏筋に触れたり離れたり擦れたり——う、ううっ！ 手や指とは、全然違う……く、ぬううッ！ お、オチンチンが、爆発しそうだ！

生まれて初めて体験したフェラチオの快感に、頬を赤らめてニヤニヤ笑み崩れる俊介。机の下、ハの字に開いた俊介の太股の間で形良い頭を揺らしているのは、学年一の優等生で学園一の美少女である藤沢美柚子。長く艶やかな漆黒のストレートヘアと抜けるように白い柔肌がとても奇麗な、妖精のようにほっそりとした身体つきの、見るからに華奢で儂げな同級生だ。

「ンあ……ン、えお……」

幼さの残る頬を恥辱に赤らめ、細く優美な眉を嫌悪に歪めて、優等生美少女は俊介の淫棒に紅く瑞々しい舌を這わす。長い睫毛に涙を溜め、黒目がちの瞳を仔犬のように潤ませて——赤黒く怒張した肉茎越しに俊介の顔を見詰めながら、細い肩を揺らし、しなやかな背をくねらせて、ちゅぷ、ぴちや、と淫らな水音を繰り返して立てる。

場所は、授業中の教室。

当然周りにはクラスメイトがいるし、教壇には教師が立っている。

俊介と美柚子の痴態に気づいていないわけではなく——むしろ、その逆。

全員が全員、身体中の神経を際立たせて、優等生美少女の柔らかな唇がこぼす微かな吐息や紅い舌が淫肉に這う淫らな水音を、必死になって聴いている。

その証拠に、教室は静かだ。

ノートに鉛筆を走らせる音はもろろん、微かな身動きに伴う机や椅子の軋みもない。教壇にいる教師もしきりに教科書を確認してばかりで、ずっと前から板書ばんしょしていない。

男子たちは目を血走らせ、ギリギリ歯軋りしている。確認したわけではないが、きっとほとんどの者が美柚子の舌や唇の感触を想像し、股間を熱く滾らせていることだろう。女子まで頬を赤らめ、なにやらそわそわしているのは——俊介のペニスに気がなつて気になつて仕方ないのか、それとも啜り泣く美柚子に共感し、口唇を犯す淫棒のおぞましい感触を想像して、吐き気を覚えているのか。

いずれにしても、

（くううっ！ たまんないなあ……これだよ、これっ！ せつかく王様になつたんだし、みんなに見せつけないとね！）

美や富を独り占めするだけでは、単なるケチん坊だ。

自分が得た物をみんなに見せびらかし、嫉まれ妬まれ羨まれてこそ、あるいは憎まれ恨まれ憤慨されてこそ——絶対不可侵の権力を得た意味があるというもの。そう考えたからこそ、昨晚クラスメイト全員にわざわざ電話をかけ、「明日はいつも通り登校しろ」という命令を下したのだ。

「ンう、ン……ちゅ、ちゅぱっ！ はあ、ふう、はあ……ま、まだ……なの？」

「まだだよ。決まってるだろ？ 僕はまだ射精してないじゃないか」

膝の間の美少女より、教室にいる生徒や教師に聴かせるために、俊介は必要以上に大きな声で追加の命令を下す。

「チャイムが鳴る前に、僕の精液を呑め。時間切れだったり、一滴でもこぼしたりしたら——そうだな、中庭で浣腸してやる。美柚子がぶりぶりウンチを漏らす姿を、みんなに見せてやるんだ」

「そ……そんなあ！」

脚の間の美柚子が涙声で抗議すると、教室のあちこちから小さな呻き声が上がった。

みんなのアイドルだった優等生を、俊介などに独占されている悔しさのせいか。それとも、睨り泣く美柚子の声に興奮し、股間を滾らせている男子が呻いたのか。はたまた、美柚子の痴態に触発されて股間を熱く潤ませている女子がいるのか——。

なんにしろ、とにかく気分がよい。

なんの取り得もなく、だれかに羨まれたり嫉まれたりすることなど一生ないだろうとすつかり諦めていた俊介にとっては、夢のような状況だ。

（ようし、もつともつと見せつけてやれ！）

調子に乗った俊介は、聞こえよがしに重ねて命じる。

「泣いているヒマがあったら、しっかり舐めろ。唾液が垂れていたら、唇を押しつけてジ

ユチュツと啜り取れ」

「う、うう……ンちゆ、レロ……ちゆ、じゆちゆ……」

——真面目で素直で控え目で、大人しくて物静かでお淑やかな、非の打ち所のない優等生が、大粒の涙をこぼしながらぎこちない口唇奉仕を再開した。

一番最初に手を使うなど命じたから、美柚子は哀れな泣き顔を仰向け、滾る男根を柔らかな頬に受けて——。

「ぶはっ!? う、うう……き、気持ち、悪い……ンお、ん……えお……」

優等生美少女の温かな舌が触れるたび、柔らかな唇が押しつけられるたびに、俊介の勃起ペニスには右へ揺れ、左へ逸れる。生温かな唾液に濡れた淫肉が、美柚子のなめらかな額にぬちゆりと滑り、真つ赤な亀頭が薄い臉を揉み、石のように強張った裏筋が柔らかな頬を傍若無人にしごきまくる。

「ンお、んあ……いや、こんなの……ちゆ、ぶはあ……こんなの、いやあ……」

泣き濡れた美柚子の顔は、美柚子自身の涎によつてすでにぐちゃぐちゃのネチヨネチヨだ。軽やかな前髪にも生臭い唾液がたっぷりと染みついて、美しい額にペタツといやらしく貼りついている。

（す、すげえ……あの美柚子が、僕のオチンチンに、こんな、こんな……やつぱり、最初の性奴隷に美柚子を選んだのは大正解だったな）

むつつりスケベのうえに多情な俊介は、好みの幅がかなり広い。

年齢の上限下限は自分を基準にしてプラスマイナス十歳くらいだが、美柚子みたいなスレンダー美少女も好きだし、対極的にグラマーな外国人女優にも同じくらい欲情する。若さも手伝い、柔らかくて温かくてヌルヌルした穴さえあれば何にだって挿入^いれたいと思うくらいの勢いだった——もつとも欲しかったのは、やはり美柚子だ。

真面目で優しく控え目で、奥手で恥ずかしがり屋の優等生。

清純が服を着て歩いているようなこの美少女に、無理矢理性戯をさせてみたい。羞じらい悶えるその顔に、ペニスをグリグリ擦りつけたい。

軽やかで艶やかな黒髪に、滾る精液をびゅつとびゅつとぶっかけたい——。

ハッキリ言えば、俊介は女のコを虐めるのが好きだ。

可愛い顔を真っ赤に染め、涙をこぼして嗚咽を漏らす——あるいは、非道な仕打ちに憤り、細い肩をふるふる震わせて眉を逆立てる——そういう表情が、なによりも好きだ。

せつかく王様になったのだし、ただオチンチンを突つ込むだけではもつたない——と、童貞のクセに偉そうに思っている。

いろんな女性を一週間、虐めて虐めて虐めまくってやろう。

どうせ虐めるなら、普通なら絶対に虐められないような女性を虐めてやろう——。

そう考えれば当然、最初の犠牲者は非の打ち所のない優等生・藤沢美柚子ということに

なる。下手なアイドルよりもずっとずっと美少女で、しかも賢く、普通なら絶対に手の届かない高嶺の花——。

ほかの者は使い捨てでもいいが、美柚子は——男子からも女子からも好かれている美柚子だけは、一週間ずつと手元に置いて徹底的に虐めて虐めて虐め抜いてやる。それだけの特別扱いをしたくなるほど、美柚子は長い間ずつと、冴えない俊介のすぐ傍で、眩しく清らかに輝いていたのだ。

なので——。

「……つたく、ちつとも上手くならないな」

昂る心を押し隠し、机の下で揺れている小さな頭を軽く打つ。

恨みがましい目で睨み上げてくる美柚子に微笑みかけ、

「しょうがない。しゃぶれ。僕のオチンチンを口いっぱい頬ばって、むっちゅじゅっちゅと音を立てて吸いまくるんだ」

具体的な指示を飛ばす。

（せっかく美柚子を自由にできるんだから、処女マ○コをいただくのは一番最後だ。まずは口マ○コ、次に尻マ○コ——手コキさせたり髪コキしたり、みんなの前で小便やウンチをさせたり——くううっ！ やりたいことがいっぱいだ！ 一週間じゃ短すぎたかな？ 一カ月くらいにしないとけばよかった）

ニヤニヤしながらそんなことを考えている俊介の、ハの字に開いた太股の間で――。

「う、あ……やめて、いや……き、汚い……あ、あ、あああ」

――ンあもっ！

嫌悪に軋む意思に反し、生臭い勃起ペニスを深く深く啜え込んで、涙に濡れた頬を強張らせながら目を白黒させる美柚子。

「ふお……ッ!？」

俊介を驚かせたのは、想像以上に温かく柔らかくぬるぬるとした、美少女の粘膜だ。

スタイルの良い美柚子の頭部は小ぶりで、だから当然、その口腔も狭い。

暴発寸前の男根はたちまち乙女の口を埋め尽くし、なめらかな上顎を押しあげ、プリプリとした舌を押し潰す。唾液に濡れた心地良い媚肉が、根元から尖端まで余すところなくぬちゃつと貼りついてくる。

（ま……まだだっ！ もっともっと、美柚子を感じないと！ せっかく美柚子が……あの、絶対に手の届かなかった美柚子が、僕のオチンチンを啜えているんだぞ！ すぐに射精してしまつたらもつたいたいじゃないか！）

一気に膨れ上がった射精衝動は、いままで感じたことがないくらい強烈だった。歯を喰い縛って必死に耐えないと、とても抑えられない。

さらに――。

「ンお？　ン……むふ……」

青筋を立てるほど怒張した淫棒を口いっぱい頬ばった可憐な優等生が、上目遣いになつていやらしい暴君の顔色をソツと窺う。

怯えた仔犬のようなその表情に、俊介の心臓が一瞬拍を踏み外した。

（か、か……可愛いっ！　なんて可愛いんだ、美柚子ッ！）

——普通なら、可愛い相手には優しくしたくなるものだ。

しかし、歪んだ性欲を持つ俊介は逆。

「き、気持ち……イイッ！　美柚子の口マ○コ、最高ッ！」

周りでギリギリ歯軋りしているクラスメイトをもっともつと羨ましがらせるため、同時に優等生のプライドを深く深く傷つけるため、大きな声で叫ぶ。不穏な静けさがじわじわ高まる教室の中、ひとりだけはしゃいで王様の特権を満喫する。

「そら、そら。早くしゃぶれ。チャイムが鳴るぞ、みんなの前でウンチしたいのか？」

「ん、む、うう……」

——じゅっ！　じゅちゅっ！

薔薇の花びらのように紅い唇を穢らわしい男根に密着させた美柚子が、真珠のような涙をポロポロとこぼしながら柔らかな頬を窄め、卑猥な音を立てた。逆巻く嫌悪に呻きつつ、ほのかに立ち上る青臭さに噎せ返りながら——長く艶やかな黒髪を細い背に揺らし、頭を

ゆっくり前後させる。

「くっ!? お、ううっ! し、舌も使え、な、怠けるんじや、ない……ぞ……!」

御主人様らしく振る舞おうとして声を振り絞る俊介だが、淫棒に絡みついてくる美少女の口唇があまりにも温かくて心地良く、無様に裏返ってしまった。

それでも、命令は命令だ。

「むぶっ!? ンお、ン……むむうっ!」

身体ごとぶつけるようにして勃起ペニスをしゃぶりまくっている優等生美少女の、重く熱く生臭い肉棒に埋め尽くされた口腔の中で、意思を無視した舌がしきりにくねる。平らに広げ、味蕾の細かなザラザラで硬く強張った裏筋を責めたり、立てた舌の縁でカリ首を切るようにしごいたり、舌の裏側のヌルヌルで弾けんばかりに怒張した亀頭の額をねちよねちよと撫で回したり――。

（なんだ、これっ!? すげえ、すげえ……く、口って、こんなに気持ちイイのか!）

美柚子の柔らかな口唇粘膜に触れた淫肉に、痺れるような蕩けるような、えもいわれぬ快感が湧き起こる。しかもそれが一カ所だけでなく――亀頭にもエラにもカリ首にも、淫茎の背にも腹にも、先のほうにも中程にも、根元にまでも――同時にあちこちに湧きまくり、そのうえ長く長く尾を引いて残る。

「ん……んじゅっ!」

「ッ!? ま、まさか……ここで犯るのっ!!」

「うん。僕って、どうやら見られながらするのが好きな変態らしいんだ」
 「あ、あ……アンタが変態かどうかなんて、私には関係ないじゃない! それに、どうして藤沢さんだけ可哀想なの? わ、私は、可哀想じゃないの!」

「だって、ほら——」

と、弥生の股間へ手を伸ばし、紅く咲きこぼれている秘裂に指を挿し込む俊介。
 「ふあっ!? あ、あ、バカ……や、やめなさいっ!」

真っ赤になって震える御嬢様を無視し、温かくプリプリとした淫唇のわずかに波打つ縁を、調べるように愛でるようにツツ、ツツ、と撫で回す。

「弥生のオマ○コは美柚子のと違って、エッチな汁でグチヨグチヨだし。それに、僕を童貞くんって呼んでバカにしたくらいなんだから、弥生は経験豊富なんだろう?」

「ち、ちが……私、そんな……」

「ええっと、なんて言うんだっけ? ヤリマン? 大学生とか金持ちのオッサン数人に二股三股をかけて、毎日毎日エッチしてるんだろう? だからこんなに濡れてるんだろ?」
 「違う、違うッ! 私、そんな女じゃ……あッ!? や、やめて……やめな、さいッ!」

圧力を増した俊介の指に若々しい淫唇をクチュクチュしごかれ、恥辱に頬を赤らめた弥生が細い腰をくねらせた。



感じているのではない。

遠巻きにしている男子たちの視線を気にして、必死に逃げようとしているのだ。もとより、俊介に「弥生をイかせよう」などという余裕はない。

(こ、ここに……この温かくてヌルヌルした場所に、オチンチンを挿入れるのか……ん？ あ、穴だ。クパクパしてる……こ、これが膣穴？ ああそうか、オチンチンを挿入れられるのはこの割れ目全体ではなく、この、指先がようやく入る程度の穴なんだな！) 生まれて初めて掻き分け入った少女の秘密の花園の、想像以上に淫らな感触に、我を忘れるほど興奮しているのだ。

(本当に入るのか？ 小さすぎないか？ ひよつとして処女だから、穴がこんなに小さいのかな……うおっ!! は、入るぞっ!!)

秘めやかに蠢いていた肉穴にヌヌツと指先が潜り込んでしまい、目を丸くする俊介。「ッ!? ば、バカあつ! なにしてるの、ダメ、いや……アンタなんか、あ、あ、アンタなんか、にい……うう、ああ……うう……」

温かく潤んだ狭い穴へヌヌ、ヌヌ——と指を挿し込むにつれ、腰を引き気味にした御嬢様が紅い顔を俯け、上擦る声で呻いた。俊介を打とうとして叶わず、代わりに空振りした細腕を俊介の肩につく。憎らしいはずの少年の目と鼻の先に、制服に包まれた豊満な乳房を揺らし、もたれかかるような恰好で、ふう、はあ、と乱れた吐息をこぼす。

「あれ？ ひよつとして……感じてるの？ 膣穴を指でヌポヌポしてるだけなの？」

「か、感じて、るう……うっ!? ち、違う、いまのは嘘ッ！ 指を何度も何度も抜き差しされている膣穴が、甘く痺れて、熱く蕩けて……なっ!? なんてっ!? いまの、私じゃない……私じゃないのよッ！」

耳の先まで真っ赤になつて柄にもなく取り乱した勝ち気な御嬢様が、周囲の男子たちを見回して必死に言い訳をする。だが、命令形として解釈される俊介の言葉は絶対だから、感じているという恥ずかしい告白のほうが本心だ。

それに――。

（うはっ!! 弥生の膣穴が、僕の指をしゃぶつてる……熱くぬるぬるとした粘膜が、妖しく蠢いて、僕の指に絡みついてくる……!）

こんな中にオチンチンを挿入したら、いったいどんな気分になるだろう？

美柚子の口でさえあんなに気持ちよかつたんだから、きつともつとずつと、滅茶苦茶気持ちイイに決まっている!

――挿入したい、犯したい、という欲望が先行し、弥生が本当に感じているか否かなどは正直どうでも良かった。

「そうか、挿入して欲しいのか。ようし、そこに四つん這いになれ。先生に見つかったら恥ずかしいだろうから、昼休みが終わるまでに済ませてやるよ」

逸る気持ちを懸命に抑え、机の列の間の床を指差し、恩着せがましく言う俊介。

「いや、いや……イヤだつて言ってるでしょうっ！」

緩く波打つ栗色の髪をおどろに振り乱し、涙をこぼして泣き叫ぶ弥生だが、王様の命令に操られた身体はぎこちない動きで四つん這いになる。小ぶりながらもむつちりとした桃尻が、いやらしく笑み崩れた俊介に向けられ――。

「だ……だれか、助けてッ！ 助けてくれた人にはお金をあげるわ！」

本当に犯されるのだと実感した弥生が、形振り構わず叫び始めた。もちろん、俊介のやることはだれにも妨げられないから、遠巻きにしている男子たちは困った顔を見合わせるだけで動こうとしない。

「十万でも二十万でも……ううん、好きなだけあげるッ！ 私がお父様に頼めば、百万でも一千万でも出してくれるはず！ だから、だれかコイツを……この変態を、止めて……あッ!? ああイヤ、イヤ……いやあああッ！」

揺れる美尻を掴み、紅く熟れた秘裂へ真つ赤な亀頭を押し当てただけで、教室どころか廊下にまで響くほど大きな悲鳴を張り上げる御嬢様。

「大袈裟だなあ。まだ先つちよも入ってないのに」

「い、挿入いられてから叫んだのでは、遅いでしょっ!? ねえ、お願い、聞いて！ わ、私、処女なの……ほ、本当よッ!? 嘘じゃないの……さつき童貞くんって言ったことは謝

る、謝りますから……ね？ お願い……あッ！　　そ、そうだっ！　藤沢さんがしていたみたいにおしゃぶりしてもいいわよ!!」

「……ホント？」

「ほ、ホントよ、ホント！」

震える肩越しに首を捻って、懸命な媚び笑いを見せる御嬢様。

（ふうん？　御嬢様のプライドって、この程度のものか。やっぱり、美柚子とは違うなあ。ちよつと興醒めしちゃったな）

頭の隅が冷静になりかけたが、しかし——目の前で四つん這いになり、白く瑞々しく輝く美尻は捨てがたい。指にはまだ、弥生の膣にしゃぶられた心地良さが残っているし——
第一、ギチギチに硬くなつたペニスが治まらない。

「そんなエッチなことを言う処女は、僕は嫌いだな。おしおきしてやる」
言い訳じみた理屈をつけて、俊介は己のペニスを握り締めた。

肉悦の予感にむくれ、さらに怒張する亀頭を、弥生の秘裂の底で喘いでいる小さな小さな膣穴へ押し当てて——。

「えっ!?　あ、ああダメ、だったらいまのはナシ、取り消しよっ！　待って、だからちよつと……うっ!?　く、ううっ!?　待って待って待って、ひ、人の話を、き、き、聞きなさ……あッ!?　ああダメダメダメダメ、ダメ、ダメ……ダメええっ！」

——ずにゆっ！ ぐちゆちっ！

溶けた蠟のように熱くぬるぬるとした肉穴へ、力任せに、一気にねじ込む。

「ひあっ!? ギッ!? ひいい……ッ!?」

破瓜の激痛に目を見開き、涙に濡れた顔をはね上げてビククツと硬直する御嬢様。

「くっ!? う……おおっ!? せ、狭い……おち、おち、オチンチンが……締めつけ、られる……ッ！ それに、ずいぶん痛がつてるし……弥生って、本当に処女だったんだな」

「ほ、本当よ、本当だったのよお……!」

「いやあ、ごめん。嘘だと思つたから、思いつ切り深く挿入れちゃつた。それに……処女を失つてもいいじゃない」

「な……なんでよっ!?」

「なんでって、そりゃあ……蕩けるくらい熱くて柔らかかな、プリプリとした弥生の粘膜が、僕のオチンチンにぬつちよりと絡みついて気持ちイイからさ。美柚子の口マ○コよりずつとずつとイイよ。よし、決めた。弥生のオマ○コは僕専用のオナホールだ!」

「よ、よくないっ！ それ、全然良くないから……あっ!? あ、ああ……」

昼休みの終了を告げるチャイムの音に、四つん這いの姿勢で背後から膣穴を貫かれたままの弥生は愕然とした。どこかへ避難していた女子たちが、紅い顔を俯けて渋々教室へ帰ってくる。机の間で俊介に犯されている御嬢様に気づき、慌てて目を逸らして、自分の席

へ戻っていく。

「み、見ない……でえっ！ 私を見ないで、お願い……見た人には、お父様に頼んで酷いことを……ふあっ!? あぎ、いいいっ!?」

暴発しそうなペニスをクイツとわずかに引いただけで、立場も弁えずに命令しようとしていた弥生が激痛に呻いた。

「あのね、弥生。弥生はもう、城山の御嬢様じゃないんだ。僕専用のオナホールなんだよ。そんな弥生が王様である僕を差しおいて、なんでみんなに命令してるの?」

「ひうつ!? あ、あぎ、あぎいい……ッ！ わ、分かった、分かりましたッ！ 分かったから、あ、あぎうつ！ う、う、動かさない、でええっ！」

鼻にかかった甘え声で、か弱く鳴き震える御嬢様。

弥生が声を出すたびにその膣穴がギュチツと締まり、俊介の淫棒が喰いちぎられそうなくらい強く強くしゃぶられる。

「くっ!? う、ううつ!? これ、すごい……美柚子の口マ○コにはなかった、きゅ、吸引……感ッ！ せ、精液まで、吸い出され、ちやい……そうだよおッ！」

童貞を卒業したばかりの俊介にはとても耐えられない、強烈な快感だ。

チャイムが鳴り、授業が始まって、狂ったように腰を振って弥生をヒイヒイ鳴かせまくり——びゅくっ！ びゅくくっ！ どびゅびゅっ！

御嬢様の膺奥へ、滾る精液を思いつ切りぶちまけた。

「あっ!! えっ!! やだ、嘘……は、葉山、アンタ、まさか……」

中出しされたのが分かるのか、弥生が嫌悪に歪んだ横顔を見せて声を震わせる。いつもの自信満々な顔とは遠くかけ離れた、弱々しい表情。

「くはあ……たまんねえ……」

同年代の男子など歯牙にもかけなかった御嬢様を、犯した、穢した、自分のモノにした——肉体的な快感以上に征服欲を満たされて、心の底から恍惚となる俊介。繋がったままニヤけ、余韻を味わっている——。

「お、終わった? だったら、葉山くんも城山さんも、早く席についてね」

教壇で居心地悪そうにしていた若い女教師が、目を逸らしたまま言いにくそうに言った。
(あれ? ああ、授業が始まったのか……)

いまさらながらに気づいた俊介は、見慣れているはずの女教師をなにやら新鮮な気持ちでまじまじと見詰めた。

桜井美鈴。
さくらいみすず

今年大学を卒業したばかりの新任教師だ。

小柄で童顔だから美人というより可愛い感じで——制服を着せたら、きっと生徒と見分けがつかないだろう。

（うへへ、羞じらう美鈴ちゃんって可愛いなあ……あ、そうだ、こうして遊ぼう！）

意地悪を思いついた俊介は、シクシク啜り泣いている御嬢様からおもむろにペニスを引き抜き、これみよがしにブンブン揺らした。

「ッ!？」

絶句して目を背ける若い女教師に、

「僕は済んだけど、ほかの男子はまだ滾ってると思うんです。弥生の尻穴で抜かせてやろうと思うんですが、いいですか？」

「えっ!! そ、そんなこと、いいに決まってる……えっ!! あっ!! 違う、そんなのいいに決まってる……えっ!! なんて、どうして……!!」

——命令口調でなくても、俊介の言葉は絶対なのだ。「してもよいか」と尋ねられた者は、それがどんなものであろうと「よい」と許可するほかはない。

涙をこぼしてアタフタしている若い女教師に満足し、俊介はクラスメイトを見回した。

「聞いたな、みんな？ 美鈴先生が、弥生の尻穴を犯してやれ、だつてさ！」

「ひっ!? ひ、ひい……ッ!？」

「違う、違うのみんな、私が言いたかったのはそういうことじゃなくって……ッ!」

御嬢様の掠れた悲鳴と罨にはめられた女教師の涙声は、男子たちの鬨の声に呆気なく掻き消された。

無理もない。

美柚子と弥生、ふたりの美少女が俊介に穢され、弱々しく鳴く様を、すぐ間近で、延々と見せつけられていた男子たちだ。

早くも目を血走らせ、鼻息を荒らげて、すっかり理性を失っている。椅子を蹴って立ち上がると、教室の中央で四つん這いのまま震えている御嬢様に殺到する。我先にとベルトを弛め、赤黒く照り光るペニスを競うように振り出す。

「だ、だ……だだ……ああなぜっ!? どうして!？」

ダメ、やめろ、とどうしても言えない女教師は、心の痛みにも可愛い顔を歪めながら教卓の脇に座り込んだ——が、俊介の命令はまだ終わっていない。

弥生は散々黴ったのだから、尻穴輪姦は単なるオマケだ。

次のメインディッシュは美鈴以外有り得ない。

「うーん？ これだけ数が多いと、弥生の尻穴が毀れちゃうかな？ 仕方ない、出席番号が四の倍数の男子だけ、弥生の尻穴を犯せ。他の者は、弥生の代わりに美鈴先生を犯せ」

「……えっ!? ええっ!? なんてことを言うの、葉山くん!？」

「美鈴先生は大人だから、オマ○コも口マ○コも尻マ○コも平気なはずだ。僕？ ああ、僕は美柚子にしゃぶってもらうから大丈夫。遠慮しないで、美鈴先生の口やケツやオマ○コに、みんなのオチンチンを突っ込んでんじやってよ」

己の恥ずかしい告白にハッと気づいた優等生は、慌てて両手で顔を覆い、イヤイヤイヤと小さな頭を振りまくる。

「違うの、違うの……違うのおおっ！」

普段は無口な美柚子が、こうして大きな声で叫ぶようになるのは、絶頂に近い証。羞じらいに急かされた直腸粘膜が激しく波打ち、熱いぬめりが滾るペニスを締めあげ、しゃぶり——。

「静かにしろよ、美柚子。みんなが迷惑そうに見てるのが分からないのか？」

「ふあっ!? あ……うううっ！」

耳元で囁かれた美少女が、熟れ柿のように赤らむ顔を慌てて両手で隠した。静かにしろ、という命令に従い、懸命に唇を噛んで嗚咽をこらえようとするが——。

「んっ!? う、うう……く、んう、ううっ！」

くねる腰に背後から絡みついた俊介の手が、臍脂のブルマを横へズラし、いままで隠されていた秘裂を顕わにした。

マシユマロのようにぶにぶにとした肉畝は、延々と続く肛悦に当てられて艶めかしい桜色に火照り、割れ目の奥で厚みを増した幼気な淫唇が、恥ずかしい蜜に濡れた縁をわずかに覗かせ、震え——。

「……ひっ!? ンひっ!? あ、ああ、ら、ら……らめえええっ！」

俊介の指先にツツと軽く撫でられた途端、押し殺された春声がわななく唇から漏れた。

トロトロに蕩けた美少女の顔が快感に打たれて跳ね上がり、晴れ渡った青空を仰ぐ。羞恥に涙する目元に淫らな笑みが浮かんで消え——小ぶりの美乳を見せびらかすように張った胸の左右にポツン、ポツンと、弾けんばかりに痼^{しこ}り勃つた乳首の形が浮きあがった。

「前言撤回。声を出していいぞ、美柚子。いま思っていることを、なるべく卑猥に、できるだけ淫らな語彙で、クラスのみんなに教えてやれ」

「ふあ、あ……ふあいいいっ！ おケツが、おケツが……葉山くんのおチンポに挟られてるウンチの穴、がああつ！ 気持ちイイの、イイのイイの……ジンジン痺れ、し、痺れて……い、い、いやらしく……蕩けちゃったのおおっ！」

声を出せという命令に促されて叫んだ優等生は、己の言葉のバカっぽい卑猥さや声の響きの淫らさに、おかしくなりそうなほど羞じらった。

細い身体が振れ、くねり——俊介の目の前で、長く艶やかな黒髪が軽やかに躍る。

尻穴の締めつけはますます強く、きつくなり——淫唇を遊ぶ俊介の指の動きに合わせて、感極まった美柚子が上下に跳ね始めた。

（うはっ!? ち、チンポが……絞られ、るううっ！ これはイイ、僕が動かなくても気持ちよくなるんだから、すごく楽なんだ！）

相好を崩した俊介は、

「よおし美柚子、もつともつと叫べ！ 叫んで狂え！ 男子も女子も、それはもういいから、こっちへ来て美柚子を見ろ！」

調子に乗って命令を更新した。

好みでない女子たちに嫌がらせをするのもそこそこの程度には嬉しいが、やはり、ペニスの快感や美柚子を虐める愉しさに比べたら取るに足らない悦びだ。

「ひっ!? ひいひっ!? いやいや、見ないれ、見ないれええっ！」

ゾロゾロと集まってくるクラスメイトに気づいて、舌つ足らずな悲鳴を発し、ますます激しく上下する美柚子。

涙に濡れた柔らかな頬は、羞じらう言葉とはうらはらに淫らかな笑みを浮かべている。

潤んだ瞳は焦点を失い、ゆらゆら、ふらふら、と虚空を彷徨う。

「み、み、見られる、とおおっ！ 美柚子、感じちゃう……のおおっ！ みんなの視線が、美柚子のオマ○コにちくちくして、葉山くんにくちゅくちゅされてるピラピラが、ますますエッチにジクジクして……ふあっ!? あ、あうヒイッ！ 開いちゃらめ、らめらめ、らめえええええっ！」

「ワガママ言うな、美柚子。ウンチの穴にチンポ突っ込まれたらお前のオマ○コがどうなるのか、みんな知りたがつてるんだぞ」

熱く潤んでヌルヌル滑る淫唇を指先に抓み、左右に引つ張つてにゅううつと拡げ伸ばし

ながら、悶え羞じらう美少女の耳元に囁く。

「見てって、言え。どんな風にいやらしくなっているかを説明しながら、だから見てって、美柚子からお願ひするんだ。なるべくバカっぽく、な」

「み、み……見てええっ！ み、美柚子のオマ○コ、ぐちゅぐちゅマ○コを、見て、見て、見てえええっ！」

大粒の涙をこぼしながら淫らなお願ひをする美少女は、甘やかな吐息をしきりに漏らし、毀れた笑みを浮かべ始めていた。男の膝の上で狂ったように跳ねているから、無理矢理言わされているようには見えない。本気で感じ——おかしくなるほど感じまくって、自分の意思で叫んでいるようだ。

「か、硬いオチンチンで、お尻の穴をグボグボされると、背骨がふにやふにやになるほど気持ちよくなつてええ……み、美柚子のオマ○コは真っ赤になるのおおっ！ 処女なのに、まだしたことないのに、美柚子は、美柚子は……すつごくいやらしいのおおっ！」

——いや、本当におかしくなっている。

なぜなら、俊介が命じていないことまで口走っているからだ。

（あの美柚子が……普通だったら絶対に手の届かなかった、僕なんかでは見ることもさえないような美少女優等生だった美柚子が……僕のオチンチンで、お尻の穴を犯されて、こんなに感じまくっている！）

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>